



## 吾妻公園

桜とチューリップの季節が過ぎ、燃えるようなつつじの花も落ち、今は花しょうぶの開花を待つ吾妻公園。街と山とが近接する桐生にあって、桐生が岡公園や水道山、そして吾妻公園は、市民の愛着が強い場所であり、四季おりおりの自然が訪れる人を楽しませ、安らぎを与えてくれる。

吾妻公園の成り立ちには桐生の産業人が深く関わっている。明治40年代、桐生産地を牽引した買継商・書上商店の支配人として手腕を振るった原勢久助氏が宮本町の谷あい、当時「まむし沢」と呼ばれていた山林を購入、好きな樹木を植え始めたのが吾妻公園のルーツである。

原勢氏は書上商店を退職後、この地で晴耕雨読の生活を送り、自然を生かした広大な庭園づくりに取り組んだ。自然をこよなく愛した原勢氏は種々の草木をこの沢に植え、丹精込めて育て上げた。まむし沢と恐れられた一帯は四季の花が咲き乱れる“原勢ガーデン”に変貌を遂げたのである。

昭和の初めには2代目の柳三氏も加わり、家族ぐるみで庭園づくりが始まった。特に果樹栽培に興味を持っていた柳三氏の参加はガーデンを果樹園に変えていった。ブドウ園やクリ園、梅林などが園内に展開し、個人所有としては全国でも珍しい規模の果樹園となった。

しかし、柳三氏は40代の若さで亡くなり、さらに戦時中の物資不足も重なり、庭園は受難が続いた。終戦の年の初夏、フジとつつじが満開のガーデン内で原勢氏は逝去したという。桐生の産業人が半生をかけて造り上げた庭園であった。

戦後、原勢氏の遺志を受け、当時の前原一治市長は市民の公園とするために庭園を購入、昭和26年に市民に開放し、同28年に公募により「吾妻公園」と名付けられた。

谷を巡り段状に取り囲む地形などに果樹園時代の面影が残り、園内を歩むと原勢氏の思いがあちこち感じられる気がする。平成26年4月からは新たな指定管理者が選定され、吾妻公園の新しい歴史が始まった。

公園のルーツは原勢ガーデナー  
庭園造りに半生かけた産業人